文教温故

坤

ホ 2
5692
2

文教温故巻之下

江戸　山崎美成著

文字

古語拾遺序曰、蓋聞上古之世未有文字貴賤老少口々相傳前言往行存而不忘といへり吾邦に文字あることハ三韓入朝し百濟内屬せし時よりぞ漢字をバ傳へしなるべし已に大江匡房卿の筥崎宮記に曰、尋其本體應神天皇之神靈也我朝書文字代結繩之政即創於此朝（古人往々この文を引用せり按ずるに朝野群載文筆部此記を載といへども引ところの文見えず蓋し全文にあらざるに似たり）益軒云我邦上世無文字讀於

門 ふ2
號 5692
巻 2
い57228

古語拾遺及匡房莒崎廟記而可知而已矣此二書古代之作可爲佐證矣或以爲上世有國字者妄説也是無稽之言不可信焉（自娯集）

日本書紀曰天武天皇白鳳十一年三月丙午命境部連石積等更肇俾造新字一部四十四巻とあれど此時の新字といふものの今傳はらずいかなるものなるか考ふべきよしなし或ハ云巻帙甚多恐訓譯之書（壺蘆録）とあるまじを釋日本紀曰新字部私記曰師説此書今在圖書寮但其字體頗似梵字未詳其字義所準據乎とあるをもて訓譯の書ならぬをハ分明なり（本朝書籍目録に新字卌四巻と載せり然れども此目録ハ永享年間本朝の書目を撰むべきよし將軍家の命をうけし外史中原氏乃記して奉るものなりされバ其世に傳はらざるものをも見聞に任せて記したるものの多かりしだ此目録に載るをもて當時現存せしものとハ必ずしもいひがたし又この書目を世に仁和寺書目と云ハもと仁和寺宮の御文庫の本をもて寫し傳へしものなりとあり已に本書の奥書に以仁和寺宮本書之普光院殿被尋之時注文云云と見えたり）又俗間に用ふるところの颪扨込䟽等の字書に載ざるものをもて新字の殘りなるなど（日本國風）いへども私記の説に字體梵字に似たりといへるによれバ決して石積が新字にあらざること知るべし

和字とて會意の文字多し神木を榊とし香木を楿に作る（並見新撰字鏡）あるひハ襷字を倭名類聚鈔（装束部衣）

服に載せたる衣袖を挙るの義に取る鈿字は室町殿日記（江口之要害夜討條）に見ゆるなれば鐵を鉤曲して造る意なるべし

又二合の字あるは貼（ヒコ）（見出雲風土記大原郡斐伊郷條）大日古の二合麿（マロ）は（見多度寺資財帳・貞觀十二年小水麿大般若經跋等）麻呂の二合なるは二合の假名なることをしらざるより字義にあづからざるものあり

まゝ白田を畠（ハタケ）に作り（見太神宮儀式帳・延喜神名式等伊呂波字類抄曰畠ハタケ白田ノ二字也作一字誤）日下を早（クサカ）に作る（見日本靈異記）これらは二合の熟字ともいふべしまた字書に文字はありながら其字詁を異にする（コト）ものは俵は俵散の義あるを米苞のことに用ひてタワラと訓（ヨミ）（見類聚國史延暦十七年十月敕・日本靈異記）拷は

山拷ありしなるを布帛の稱としてタクと訓（ヨメ）り（見日本書紀仲哀紀・豊後風土記）これ等の文字古昔より用ひ来れるを已に久しく世儒槩して乖誤とするものは殊に通論にあらず

衢（ちどり）雫（しづく）凩（こがらし）栬（もみぢ）杜（もり）俤（おもかげ）この類は連歌の懐紙の為に造れる文字なるよしこれを新在家文字といふとぞや又扒（さらえ）圦（ます）閊（つかえ）錺（かざり）等の字ありこれは作事修理方にて用ふる文字なるよし觀鵞百譚まゝ明暦三年鈔本の刀劍鑒定の書に用ふるところの造り字ありなれば其書を伺ふことのあり

とも容易く知らざりしなんが為なるか其字に㚒
薡煙ハ屋宔 鉃 錵 坊等なり此の字
㚒ハカ田ナ薡ハサ氣の合字なり造意最拙しといふべし
かゝる文字に至りてハ知るとも益なく知らずとも損なきに
似たりといへど亦博物の一端ならざらんや
熟字の偏旁を省くる事互易増損これを用ひたく害
なしとせり吾邦古しへより亦この例あり古事記根堅
洲國條に亦來日夜者入呉公與蜂室とある呉公を
蜈蚣の省なりまた家長日記御行御遊條に康業が
奉行なく此御比也ども御所にてもてなせられきとなる

比巴ハ琵琶の省なり書名にも夫木和歌抄ハ扶桑の
省文なり人車記ハ兵部卿信範卿の日記なれバ信範の
左旁をとりたるなりかつて字鏡集の古鈔本を見たり
しにその奥書に酉酉玉卜完とありこれを醍醐理性
院の省文なり省字多くハ両字連續に過ずたるに
かく數字に至りしものたえて見ざるところなり
佛家に古來より用ゆるところの省字あり抄書に便
せざるなり荎 華臺 佛 佛頂 棙 林泉 価 西佛 釗 金剛 复
安居 取義 此等の字見天台家阿彌陀坊抄等皆私作字
なり佛者の書此類多しこれを抄物書といひ傳宗の

時文字を省き筆を労せざ又卄菩提卄菩薩メメ聲聞ヨヨ縁覺七火涅槃四四煩惱盬尻○按ずるに卄ハ菩薩の二字を省合せしあり弘法大師ノ心經既にこの字體あり龍龕手鑑ニ曰ク卄ハ菩薩ノ二字又卉ハ音菩提二字と見えたりされバこの二字ハ吾ガ邦の略字にあらじ又涅槃を七火とかけるハ炎字を謬まるなるべし日本靈異記に涅槃經を炎經とかきたりことさらに省れ僧徒の書寫に便ならん爲に作れるものなり天文年間鈔本の沙石集に懺悔をササ地獄を土犬髑髏を骨骨華嚴を𠫪ムに作れり此類すべて書寫繁劇あるときは勉て簡便に従ふのみ

省文者細書之用也寫細字者能此可以省功如未知此法則不可以讀細字此亦幼學所當知也 和楷正訛

まして讀書ハ抄書を簡要とす省字に書べきところを課程眞字の半を減ずべし 初學問答 あるひハ乖誤の俗字として用ひざるに至るものあり字體の正訛ハもとより論ぜざる所にあらじたとへあれど廟を庙に作る俗字にあらじ 示兒篇ニ曰ク如キ顧之顔覇之覇喬之高獻之献國之国廟之庙云云凡此皆俗書也 文昭案ニ庙見ニ儀禮ニ非ス訛ニ字ニ 佛を仏に作るハ古字なり 通雅ニ曰ク仏ハ古ノ佛字宋ノ張子賢ガ言フ京口甘露寺ニ鐵鑊有リ文梁ノ天監造仏殿前 まして盡を尽藥を菜圖を図實を実に作るが如きハこれ草體の變じて楷書となるものあれバ省文にあらじ又田地ノ反の反字ハ段の草書反字に似たれバ誤まるなり 見ニ兼獨譚ニ 年齢を記すに何才とかける

才ハ歳の省文を戈に作るが才字に似たるをもて誤りしなり 歳を戈に作ること僧日蓮が眞蹟の題目に建治二年太戈丙子とあり及び其高足のかける題目にも往々これあり又文和二年太戈癸巳と銘ある琵琶の搨本を藏弆せるも併せて證とするに足れりこれら音も近く字形も似たれバあり猶この類少からぬ餘ハ準知すべし

文字の偏旁に俗稱あり灬をレングワ．禾をノギ．刂をリタウ．酉をヒヨミノトリ．などいへるが如しさて灬をレングワといへるハ字書に烈火字 字彙 とあれバ連火にハあらで烈火の音の轉訛なるべし禾をノギといふハ禾の訓あり芒をノギ穎をノゲとよめるも同義なり稻著有芒之穀總名也 急就篇

といへるを併せおもふべし刂ハ立刀なり忄を立心といひイを立人といふに同じこれハ吾が邦の稱にはあらで晉の王羲之が云立人之法ハ如鳥在柱首イ之類是也 筆勢論 といへり或ハ利刀 書言字考 などいへるを正義にあらず酉をヒヨミノトリとよめるハヒヨミハ暦日のことなり 東雅に曰ヒヨミとハ日讀なり古語に凡物をかぞふるを讀といひたり暦本をコヨミともいふもこの義なり その暦日に用ふる酉といへる意にて鳥字と同訓なれバ混ぜざらしめんが爲なり旅宿問答に曰サン水ニ日ヨミノ酉ヲ書キ字訓シテ酒ト付タリと見えたれバふるき稱なりさて酉字のみならずむかしハ十二支の文字ハすべてヒヨミをもてよめるなり

寅ハ清巖茶話ニ曰寄虎戀ニてハ時のとらをバよまぬことあり時の寅も虎のことなれど日よみハ寅ハ字からりしを午ハ和歌童蒙抄ニ曰孔子ノ道ヲオハシケルニ馬ノ垣ヨリ頭ヲサシ出タリケルヲ牛ヨトノタマヒケレバ弟子ドモアヤシト思ヒ顔回ゾ十六町ヲ行テ心エタリケル日ヨミノ午ト云フ文字ノ頭ヲ出シタルハ牛ト云フナリ申ハ袖中抄ニ曰萬葉集ニ申の字を書てましと詞よつゞり申といふ詞をましてあどもよめバ其詞を略していふなるべし而此申字をバひよミのさるとよめバさるハましと云ところえられたり戌ハ壒嚢抄ニ曰戌ハ亡冦ノ又呉音ハム讀ハ

ツチノエ也是中ニ一點ヲ加レバ戌思律ノ又常ニハジユツト云日ヨミノイヌ也と見えたりこれらの餘ハ推して知るべし

唐土にも偏旁の稱あり草頭木脚碧雲騢立人挑土 續書譜 などの類猶少からず

假名ハカリナとよめることにて唐土の字音をかりて吾邦の言語をうつしたりその字義にかゝはらで櫻を佐久羅雪を由伎と書たぐひあり名ハ字といふことになり字を古しへ名といへり 周禮ニ曰外史掌達書名于四方注ニ曰古曰名今曰字 さていにしへの假名ハすべて右の佐久羅由伎などの如く書たるを萬葉集の頃ほひまで音訓をまじへ用ゐ

たとへバ鬱蟬ウツセミあるハ布本フモト麓とかける類これを世ニ萬葉假
名といへり眞假名ニむかへて省きて書けるを片假名と
いひ草體ニかけるを平假名といへり片假名の名ハふるく
うつほ物語（藏開巻）狭衣などにも見えたり平假名を平
易の意（本朝學源）なりなどいへども古き稱ニあらざるなり」
片假名また大和假名ともいへり倭片假字反切義
解序曰到於天平勝寶年中右丞相吉備眞備公取
所通用于我邦假字四十五字省偏旁點畫作片假
字といへりこれ古來よりいひ傳ふるところなりといへども
無稽の妄説ニして信ずべからず只常の伊呂波假

名とともに弘法大師の造りたまへるとも（和字正濫抄）いへど
これも又信じがたし抑かの其始めハ詳ならねどこれ伊
呂波假名になぞらへて四十餘字を一様ニ作り出せる
ものとハおもはれずそのかミ古體の片假名の古書ニ
訓點及び點圖ニ殘れるニよるときハその始ハ字訓を
傍記せんニ眞名をとりて書んハ點畫多く煩はしきが
まゝ省きて書けるが是片假名の起原なるべし今流布の日
本書紀ニ税調大力ツキ（仁徳紀七年九月）とあるハオホチカラミツキの
借訓なりまた吾兒ワガイロ和加世（履中紀六年二月）と左に假名を付たるハ
ワガセの眞假名なりこれらの類猶多し今その一二を

擧て證とせむかしハ字畫の少きに省きて其まゝも用ひたり
と見えたく今昔物語に乃ノ字天ノ字などに眞名をまじへ
書きたるもありてかくれぬ古點に片假名の異體多かるハ
亦タ宜なりけりや
片假名何の時より今の字に定まりしならん字體まぎ
らはしかりしハ古體ハチイ伊ロホ保禾ワ和ちヨ與示レ礼
示子祢レム毛乃ノ乃ヽキ幾チテ天アミ身アミ民七
サ左レヒ比爪ス爪の類昔人用る所ロ往々かくの如し
然るに示レ示子同字を用ひ又禾ノ字の形も似たりアミ
アに混じレヒレムレに混ずよつて云フ古昔書籍の訓點の

如き諸家の點圖にまじれるに此の如く假名を用ひたく
各自ラ讀法あり故に讀易キ書も輒くよミ難し好古日録
古書に片假名の異體あるもの少からじ今その下二を
いはゞ日本靈異記の訓釋に用ゐる所ロ皮ハ波字の省ヘ音
倍字の省大須本將門記の訓點に于ウ汀シ之草體寸キ樹
丆マ万などの類あり又二合のもれあり㐂トモ刂ヨリの如きを今
已に用ふれども卜キの假名に昔ハ上とかけるありこれハ
古體のミヘ卜を合せたるなり今寸トキとかけるハ時字の省
文なるべし
伊呂波假名ハ弘法太師の作なり江談ニ曰ク天仁三年

八月日向小一條亭言談之次問曰假名手本何時始起乎又何人所作哉答云弘法大師御作云云件事無所見但太后自筆假名法華經供養之時被行御八講之講師南北英才相並為導師高名清範慶祚等之輩各振富樓那之辯才之後源信僧都又勤此事說云日本國誠雖如來之金言唯以假名可奉書也弘法大師云傳習諸眞言梵字悉曇等密法之後寄四教法門作イロハニホヘトノ讚給以來一切法門聖教史書經傳不離此讚文字イロハノ字ハ色白ト云心也不說他事只必此事令講人々皆驚

耳目之由所傳聞也古人日記中在此事者又問之然者件弘法大師御時以往無假名歟日本紀中假名日本紀在之由慮外令見如何答云此事尤理也雖然只付倭言令書也猶イロハニ者彼時始歟云云

一說伊呂波有三段イロハニホヘトチリヌルヲ（奈良護命僧正作）ワカヨタレソヱヒモセズマデ（弘法大師作）京（傳教大師作或云慈覺大師作○河海抄引○按ずるに群書類從に載るところの江談抄に此事見えず蓋し佚文あるらん）釋日本紀曰伊呂波者弘法大師作之由申傳歟此者自昔傳來之和字於伊呂波尓被作成之起也云云なほこれより後の諸書にいふところ大

かくて其說相同じ今已に大師眞蹟の伊呂波を傳へたり其摹刻數本あり原本ハ出雲國神門郡神門寺にありとぞや凌雲集に從五位下行內膳正仲雄の謁海上人詩曰字母弘三乘眞言演四句とあるハ海上人ハ大師を云詩に字母といへるを伊呂波四十七字眞言四句とハ大般涅槃經の諸行無常の四句の偈此偈ハ過去見在因果經等に見えたりをいへるなりかゝる確證あるときハ大師の作なること疑ふべからず伊呂波の義を釋せしもの密嚴諸秘釋に載る以呂波釋以呂波略釋その始めなり後世天理抄字考錄等の書數十部に至る枚擧に

遑あらず

伊呂波假名の終りに京字を書るを何の謂といふことをしらず然れども河海抄に引用せる江談已に其說あるときハ其來ること古しといへども大師眞蹟ハさらなり伏見院尊圓親王經朝卿行尹卿等の書せるものにもなしとゝ後られ京字あらざれバ京字をくへたるハ後人のさかしらなるべきを萬葉代匠記の總釋にこれを大師の所爲と心得ゆゑあるべしとて種々辨論せるハいかゞ傳會の說なり四十七字にて言足たり歌の心も聞えたるに更に京字連續くべくもあらず瓦礫雜考などいへるぞ具眼實を得たり

といふべし
古今和歌集序に曰難波津の歌ハみかどのおほん始めなり
あさか山のことばハ釆女がたはふれよりよみてこのふた歌ハ
うたのちゝはゝのやうにてぞ手習ふ人の始にもしけるとぞあり
榮雅抄に曰難波津あさか山の此ふたつ歌ハうたのちゝのやうにて
徳ある歌なれバ手習ひそむる歌にもありとよみむかしの能書の
手本に多くかゝる見ゆむかしハ手ならひ始に
いろはをならふを常とし此ふる歌をならひたるにや已に源氏物
語にも紫のうへ幼少の時なにはづをだにはかばかしう
つゞけ侍らざめれバかひなくなんとも見えたり今も猶遠
境邊土にも上世の遺俗ありて古風の想像すべきこと
なきにあらじ塘雨が云予九州にありし時宿の小兒に始て
手習させんと手本を書て得させよといふものから彼いろ
はを書てあたへ其親のいふやう上方ハ手習の始にハ斯
いろはより學び候や去ばこそこの邊土ハおくるれ片田舎
なれバ時世の風俗の傳へ難きゆゑにやと恥かしきことを
ありと云ふしからバいかなるてを此邊にてハ書初るやと問へバ
難波津に咲やこの花此和歌と淺香山影さへ見ゆると
いふ和歌二首を習はしむと聞えりがなも源語の中近くハ
蘆刈の謡曲の中にも出たり故あるをしれと感じやゞく
二十首をかきてあたへたり笈埃随筆といへりさて今の如くいろ
はを習ふこととも亦ふるし台記に曰久安六年正月十二

日今日今麻呂參御前依教書以呂波今麻呂ハ頼長公の息也
よし見えたり又長生殿の詩を習ふこともあり吾妻鏡貞
應三年四月廿八日有若君御手習始之儀陰陽權
助國道朝臣擇申日次今日己未時其儀兼被上南面御
簾三間御硯一面蒔鶴御手本昨日自京都參着等置文臺置御
座吉時前奥州著布衣被參若君出御宰相中將布衣被候傍順之參進開御硯蓋搨墨染筆被進取之
習始給長生殿詩云云若君とあるハ藤經頼卿の息なり
眞字と片假名とを交へ書るときハ口ハ口舌の口にまま
ぎるる二ハ二三の二にまぎるる力ハ勇力の力にまぎるる夕ハ

朝夕の夕にまぎるるかく混じ誤るやすき文字ハ文の害と
なることなれバ心をつくべきことなり洗革巻又歌などさへぬ
ことなれど物かくに心得べきこともありあれバなけバさけバ
さけバちれバなどのたぐひの言を誰も有バ行バ聞バ咲バ
散バと書ことなれども古の書てハあるハともあるバともよまれ
其外もその格なくまぎるる故に語の意しらぬ人ハよみ
あやまりて写すとてハなけバなるをゆくハともゆくべとも
假名なきとかきなしたるとありされバかく互に讀まがふべき
言ハいろは假名にかくべきことなり又霞契などを用言にかなを
かりかすむ月ちぎらぬちぎる言の葉などやうなるを霞

たり霞月契ぬ契言の葉などかくハよろし用言にいふ時ハ霞みたり霞む月契らぬ契る言の葉などやうにもちふる文字をそへて書くべしすべてかく體と用とふたつの詞ハ用のときハそへらく文字を添てかゝざればまぎるゝことあるなりそへらく文字とハ霞まん霞み霞む霞めれまみむめれ類ひなり又もみぢバといふたゞ紅葉とのみ書てハもみぢとのみいふとまぎるゝ故につねに紅葉ぢとかくことなれどこハいとあるまじき書ざまなりもみぢ葉と書べきなり葉をバ眞字(ナ)に書べしこれをもとのに假名に書てハてにをはのたぐひにまぎるれバなり又かくれがやどりなどの外に家の字をかくハひが

ごとなりこれらのかハ處の意にて家といふことにハあらずされど處とかくべきにてもあらざれバたゞ假名にかくぞよき又隠が住かなど上を眞字下を假名に書たるハこともなく見ゆ此類ひ多し同じさびしに淋字いるなどや物おもひながめに詠字もいれて詠ハ聲を長(ナガ)むることをいふこそあれ物を見るながめにハよしなしさて又つゞりに目なれぬ文字を注すことまづくるしすべて上件の類ひのことどもを猶いと多かり餘ハ准へて知るべし 玉勝間 假名文字かゝるにハこれらの心得あるべきことなり

古昔葦手(アシデ)歌繪(ウタヱ)とて戯書の一體あり葦手此名ハ天徳

四年歌合記拾遺和歌集等に見え歌絵の名ハ後撰
和歌集拾遺和歌集等に見えたり源氏物語に曰宰相
中将式部卿の宮の兵衛督うちの大殿の頭中将な
どにあしで歌絵を思ひ〳〵にかけとのたまへバ皆心にいど
むべかめりあしでハさうしどもぞこゝろ〴〵にはかなうをか
しき宰相中将のハ水のいきほひゆたかにかきなしそゝけ
たるあしのおひざまなど難波の浦にかよひてこなたかなたい
きまじりていたうすみたるところあり又いといかめしう
引かへて文字のやう石などのたゝずまひこのみ書たまへる
ひらもあめり目も及バず是ハいとまいりぬべきものかなと

けしうめでたまふとありさてあしでハ河海抄に葦手
と書たり花鳥餘情に曰あしでの色葉ハあしの葉のなりに
文字を書なり水石鳥などのかたちもかきなをなり歌
絵ハ岷江入楚に曰或註に歌絵とハやといへバ矢を絵にかき
こといふに輪をかきみといふに荷を絵に書なり按ず
るにあしでと歌絵との差別ハこれまたく大かたハ知らるゝ
そのかみ五月雨記に載る香疊の絵に歌絵をさしゝく
葦手といひたるより其稱を混じ訛り傳へて遂に分明なら
ぬが如し近くたとへていはゞ葦手ハ今のちらし書の濫觴とも
いふべく歌絵ハさとり絵の鄙俚なるものともいひつべし

文章

吾邦上世文字なく口々相傳ふるよし已に古書に明文ありされバたゞ言靈のたすくるのみことなりし漢籍の渡りきてより後ハなか〳〵にもなりし公私ともに漢文を専らに學び用ひて別に今の和文といふものゝ如きハ絶えてあることなし（祝詞宣命のごときハ吾邦上世の言語をそのまゝにうつせしものなれバ今の和文の起原なりける）（猶下に詳にいへり）已に聖徳太子の十七條憲法（見日本書紀推古紀）を始として國史律令以下官符願文等及び萬葉集ハ歌書なれども端作りハみな漢文なり文章とさへいへバまづ博士家の専業なるをやさて延喜天暦の頃

より假名文いできて古今和歌集・竹取物語など乃撰ありこれより後假名文の吾邦俗に簡便なるをもて普く世に行ハれ用ひられたれども雑史家乗の如きに至るまでみな眞名を用ひたりき假名文ハその詞などうるはしくかたくしらぬが婦人に便りあれバ女房達の私の日記草紙ハさらなり公けにも御湯殿上日記・女房奉書などみな假名文にかゝれたり故に紀氏の土佐日記にも男もすなる日記といふものを女もして見んとてするなりとかゝれたるハ眞名にてかくべき日記をしどけなく假名書にかゝれしかバやがてさるいへるなり已に源氏物語にふみ作るといへるハかな文なるね

まてもあるべし　されども漢文ハとても吾が邦の風俗ならねバ其文法の如きハ唐宋諸大家の文章に就てその體裁をあるひつきまなべし　益軒云國俗娵嫺乎武事而拙乎文藝故古來文學不足唯此一事不及中夏爲可嫌而已矣是本邦學者之所以可激勵而企及也又云雖古昔名家之士其所作多艶麗嫵媚之詞而有婦女之風態不純正雅健而無丈夫之氣骨恐不可爲儒者之文也其不關世教者未足責而已矣是中夏人之所可爲誹笑而吾曹之所當自恥也唯近世先輩宿儒之所作有與彼艶麗異者可嘉賞焉（自娯）

集これより後享保元文を經て文章の體格唐土に愧ずといふべし　蓋し古昔の文ハ浮薄巧麗をのミ主として文辭ハ拙けれども名分を謬ることなし　近來に至りては文法正しく修辭巧なるものから稱呼の妄りなること最も多し　近學墮市井文不振乎搢紳憒乎舊典不之顧或呼元明爲中華自稱爲東夷殆幾乎外視萬世父母之邦而無蔑百王憲令之著矣（保建大記）といへるぞ至言ありける已に近來文章に妄稱多かるを安齋の呵純村田氏の作文通弊等に詳に辨駁あれバ今こゝに贅せず稱呼ハ名の存するところ子曰必也正名乎（論語）といへり

聖人正名の學あるに講じ明めざるべからんや學者よろしく
思ひを致すべし

公式令曰皇祖・皇祖妣・皇考・皇妣・先帝・天子・天皇・皇
帝陛下・至尊・太上天皇・天皇諡・太皇太后・皇太后・皇
后・右皆平出・大社・陵號・乘輿・車駕・詔書・勅旨・明詔・聖
化・天恩・慈旨・中宮・御・闕庭・朝廷・東宮・皇太子・殿下・右
如此之類並闕字凡汎説古事言及平闕之名非指
説者皆不平闕義解云謂汎者博也假令上書云凡
人君者父天母地故曰天子此非指言其君縁博説
人君之體自然及平闕之名即如此之類皆不可平
闕依上條以國忌可廢務者為限但此雖國忌以外
而應指説者亦為平闕吾邦平闕の式全く唐制によれる
唐六典に載るところと異なることなし近來一字擡頭二字
擡頭などいふ書けるハ公令に違ふといふべしさりて平生往
復の俗翰にハこの平闕の式によるにおよばずとあり 夏山雑談
忌諱の文字を缺畫することハ古昔よりなきことなれども
これ又唐制に若寫經史群書及撰録舊事其文有犯
國諱者皆為字不成 六典 とあるによるものなるべし元の陶
宗儀が淳化閣帖のことをいひしく逐巻逐段各分字號
以日月光天德等二十字為次第後避金主亮諱但

庾亮帖内亮字皆去右邊轉筆謂之亮字不全本輟耕
録といへるも今の缺畫のことなり
國人多以年號甲子剪截書之如文祿癸巳爲文巳
天文癸卯爲天卯是也將使後世何所取信也耶必
不可用書年號如書元祿三年庚午是其正法也或
加甲子于年號之上非尊正統之意刊謬正俗
しかあるべきことゝぞかしさて年號甲子を剪截してかゝる
これふるく見ゆるハ花上集の半陶子が序に長享癸酉を
享酉と書き相國寺の惟高が作物記見信長記に永祿戊
午を永午とかゝるが如きその頃僧徒の文に見るところ少

からず此の比五山の禪僧つとめて奇を好ミ新を出すれ
所爲おほくその由來するところハ聯珠詩格の默齋が序に
大德丁酉を德酉とかけるに據るものゝ詩格ハ律髓三
體詩などゝともにそのころ專ら行ハれしものなれバ一時
雷同して效顰せしなるべし明の顧炎武が云唐朝一帝改
年號者十餘其見於文必全書無割取一字用之者
至宋始有熙豐政宣建紹乾淳之語已是不敬然猶
一帝之號自相連屬無合兩帝而稱之者又必用上
一字惟元豐以元字與元祐無別故用下字本朝文
人有稱永宣成弘嘉隆合兩帝之號而爲二稱天啓六年

部疏稱正統平德爲二一正奉旨列聖年號昭然如何說二丁正 近又有去上字而稱
慶曆啓禎更爲不通矣日知録 吾邦の文章にもまゝこの
謬稱ありかくまじきことなるをさて假名文の年號におけ
るや古今和歌集序中も延喜九年とあり歌の詞書中も
寛平の御時など字音にて讀ましむる後のことなれ
ども清輔朝臣の尚齒會記にあるをすべらぎ乃君の
御政をよろづの民もうけやすきとよめるハ承安なりまた
源光行の蒙求和歌序に年ハもとのひさしき時ハきのえの
秋のどけきみづのえとよめるハ元久なりいと近くも長嘯子の
慶長をよろこびとこしなへと擧白集かれたるなどハ日本書

紀に朱鳥をあかみどり天武紀とよましむる例なりや凡年
號ハ訓によまするもあれど大かたハ讀がたきが多かれバ音
讀を常とすたまく文章にはおかしかるそれかゝしき時ハ
ともあれなべての例とはすべからじ
吾邦上古の言語ハ自ら詞にあやありくそれを口ずから
めでるまなくらつせるぞ古文にハありける今その一斑を窺ふ
べきものを古事記に載せる大國主神國避の條に出
雲國多藝志小濱に天の御舍を造りまつるときの祝詞
なるべき曰鎌海布之柄作燧臼以海蓴之柄作燧杵
而鑽出火云是我所燧火者於高天原者神産巣日

御祖命之登陀流天之新巣之凝烟之八拳垂摩弖燒擧地下者於底津石根燒凝而栲縄之千尋縄打延爲釣海人之口大之尾翼鱸佐和佐和邇控依騰而打竹之登遠〻登遠〻邇獻天之眞魚咋也とひるど殊にすぐれて類ひなき上世の言辭の優美なるをねりのべしさて古言に通じたるうへにてこそ古人の情世態をも格別に明らかにしらるゝをありことをしらるべき時ハ徒らに國史等を讀ども誤解すること多くして事實をとり失ふことなきにあらじされバこの古言を學ぶをこれ又一科の專業と定むべきことあり大かた奈良の朝より以往の古言の文詞の世に傳はれるハ延喜式の祝詞續日本紀の詔詞のミこそあれ古昔片假名平假名といふものなかりしかバ物をしるすに吾邦の言語のまゝハ錄し難かれバ唐土の文法にならひてよろづのことゞもを漢文もて記しそれを歌のミぞいにしへの萬葉假名をもて記し又祝詞宣命も古語のまゝに書てひと文字も違へずてにをはの假名さへも細書に添へり 古事記傳 詔詞解 これより後中むかしの和文その體裁一ならず 和學大概 物語にハ伊勢竹取うつほ源氏そのまゝくハおのゝ同じかゝれど詞ハことに賞すべし日記ハ土佐日記冠なる

なし後世日記の類多しといへども及ぶべくもあらず序ハ古今和歌集序大井川行幸序といふ紀氏の撰なれバ實に無比のものといふべし これらをもて中古の體ハ伺ひ知るべきなり和文の中自らまた記事議論の體裁そなはれるを殊に源氏の中にても帚木の巻雨夜の品定上の段女の心ざまを論じるところ中の段三つのたとへを擧て人の眞偽をしるところハ議論の法とすべし下の段に各むかしありつる事を語るあるところは記事の法とすべし近世の文ハ大中臣輔親卿の家集の序及び藤原基俊卿の抄物此類その體俗に近くしてさしも名聲のきこゆる人の文章もその人にはあら

ひとおもへることの多かるをバここに論ぜず

國文世跡

假名づかひを大かた天暦の頃よりあらかたまでハ伊韋延惠於袁の音みな正しく文下に連れる波比布閇本と阿伊宇延於和韋宇惠袁とのたがひみだれ誤りなこと一つもなし それよりみな口にいふ語音に差別ありけるなり然るを語の音にそいなしへも差別ハなかりしをただ假名のうへにかく書分けるのこありとおもへるハ非なりげなるより差別なくバいかで此の書と彼の書と假名の違へることなく自然に同じきをもて知るべし かくて中古より漸くに音みだれてもの書にも別なくなりたるを

其後京極黄門の假名づかひを定められしかども古書なもよりて心とて定められつる故に古への定まりとハいひがたく異なりけるを其のち此歌人ハ古へハ假名の差別ありしをたゞ彼卿なん始めて定めたまへると思ひ又近き世に至りてハたゞ音の軽重をもて辨ふべしといふ説などもあれどこれ古をしらぬ妄言なりける 古事記傳

古しへの書簡ハまづこれ漢文なりしを其後平假名めでたくのことを吾が邦の辭にかゝる世となりてハ假名文の消息を専らかゝるをむしろ物語を見ても知らるゝことなりけるさて古昔延喜天暦の世文學さかりに

行はれしよりこのかた元弘建武の頃までハ朝廷に奉る文書ハいふもさらなり私に贈答する書翰もさるべき人ハこれ漢文にてこそ書きけめ今も猶搢紳家にハ古風を存して漢文をのみ用ひらるといへどもそのゝ世間俗簡の往復ハいかにありけん今よりハ委しく考へがたしさりし吾妻鏡を按ずるに公事にハ大むね漢文の法に和語をまじへたる家記などの文體に書きその外の書牒ハ假名文なるをもておもへバ民間にハ大かた假名文をのみ用ゐしと見えたりされど消息體の雅文にハあらで常語をそのまゝなるや書きけん今ゞ貴賤ともに

用ゆる文體ハ和語にもあらず漢文にもあらぬ一種の體裁にて明衡往來十二月往來などやその起源あるべき

詩賦

日本書紀ニ曰ク皇子大津ハ天渟中原瀛眞人ノ天皇ノ第三子也容止墻岸音辭俊朗爲ニ天命開別天皇ノ所レ愛及長辨有リ才學尤愛ス文筆ヲ詩賦之興ル自リ大津始レリ也と正史ニ既にかゝる明文あるときハ豈ニ輙く喙を加ふる所あらんやさてハあれど今昔物語ニ曰ク天智天皇ノ御代ニ大友ノ御子在マシケリ心ニ智リ有テ才賢カリケリ文ノ道ヲバ極メテ好ミ給ケル詩賦ヲ造ルコトハ此ノ御子ノ時ヨリゾ此ノ國ニハ始マリケルとあり復タ懐風藻ニ以テ大友皇子ノ詩ヲ冠ラシム於大津皇子ノ首ニ則大津皇子之前爲有ト詩矣

本朝學原これによるときハ吾ガ邦詩賦の始めハ大友皇子にこそあれ向陽林子既に此ノ事を論じて云ク日本紀ニ曰ク詩賦之興ルハ自リ大津始ル也紀ノ淑望古今倭歌集ノ序ニ曰ク大津ノ皇子始テ作ルト詩賦ヲ何ツ不ル言ハ大友ヲ乎想フニ夫レ壬申之亂大友天命不ソ遂而太弟得タリ志ヲ郎チ是レ天武帝也舍人親王ハ者天武ノ子也故ニ撰ル日本紀ヲ時諱テ而不ル言ハ之ヲ乎抑亦大友ノ子孫憚テ而不ル傳ヘ之ヲ乎大友久ク蒙ル叛逆ノ之寃ヲ故ニ其ノ詩

不傳于世是以淑望亦未見乎微懐風藻則大友之才寥々乎（本朝一人一首）さてこれより後續日本紀このころ詩を賦せしむること多く見えて世々その人に乏しかれば殊に本朝者詩國也（江吏部集）などいへるなども當時盛に行はれしことを想像すべし
詩賦はともに吾邦の風俗にあらねばその體裁はみな漢籍によりて思ひよりきたるなるべし殊に唐詩をもて準則とせるにありけるをさて詩の唐に盛なる今さらいふべくもあらねばされど唐人詩論久無專書其數見於載籍亦僅々如晨星獨我大同中釋空海遊學於唐獲崔融新唐詩格・王昌齡詩格・元競髓腦・皎然詩議等書而歸後著作文鏡祕府論六卷唐人危言盡在其中但惜不每章題曰誰氏之言使後世茫乎无由採擇矣（半江暇筆）といへりされども實に唐人の面授口訣大に詩家の闕を補ふに足れるを按ずるに乾隆四庫總目に載るところ本事詩一卷（唐孟啓撰）詩品一卷（唐司空圖撰）の二書のみ其他釋皎然が詩式賈島が二南密旨等ありといへども僞書の疑ひなきにあらねば
明の謝肇淛云吾教世之學詩者先須讀五經不然無本原也次須讀二十一史不然不知古今治亂之

略也次須讀諸子百家不然無異聞異見也三者皆於詩無預而無三者必不能爲詩譬之種林由汲泉水而後可以謀及麴蘖也噫今之啜糟哺醨而不知有水米者多矣小草齋詩話これによりてかのものに吾邦の詩人も亦復かくあるべきことなるべしや唐詩を誦し漢籍を讀むハもとよりそのところなれども吾邦の事實をも詳らかに知るべきことなり古來より唐土の故事のみむねと作るものぞ吾邦の事に及ぶものの最も少しさそ吾邦の故事を詩料に用ゆるものの詠物にかぎりてハ新井白石冬日過其家主人請詩白石求題主人書容奇二字

示之白石解其意輙作七律一首蓋容奇者雪之訓讀主人書之以試白石白石已解其意故句々徵我邦雪一座服其敏警詩云曾下瓊鋒初試雪紛々五節舞容閑一痕明月茅渟里幾片落花滋賀山提劍膳臣尋虎跡捲簾清氏對龍顏盆梅剪盡能留客濟得隆冬無限艱此一時遊戲雖不足論全豹亦可窺其天受之一斑日本詩史まゝ冨士谷成章が扇を詠ずる詩云閑時蟣螺巧搖翅搨去鷗鷺不發聲大堰錦波春十里弘徽繡帳月三更睹暮秀娃裁詞藻按譜才郎擅品評祇自五絲縈七骨由來枉得合歡名日本詠物詩

この二詩は作者のごときいづれも吾邦の典故に
熟し且錦心繍口の才あるをもて咳唾もまた珠玉
ならぬはなし

源氏物語花宴巻に二月の二十日あまり南殿の櫻の宴
せさせたまふ后春宮は御つぼね左右にしてまうのぼり
たまふ云々日いとよく晴て空のけしき鳥の聲も心ちよげ
なるに親王達上達部より始て其道のはみな探韻たま
はりてふみつくりたまふ宰相の中將春と云文字たまはれりと
のたまふ聲さへ例の人に異なり次に頭中將人のめうつしも
ただならずおぼゆべかめれどいとめやすくもてしづめてこわづかひ

などものものしくすぐれたりさて人々は皆臆しがちに鼻
じろめる多かり地下の文人はましてみかど春宮の御才
かしこく勝れてかかる方にやんごとなき人多く
ものしたまふころなるにはづかしくてはるばるとくもりなき
庭に立いづるほどはしたなくてやすきことなれど
くるしげなり年老たる博士どもは形あやしくやつれて
例なれたるもあはれにさまざま御覧ずるなんおかしかり
ける花鳥餘情に曰く先第一儒者奉仰獻題次書韻字
盛中垸置庭中文臺上近衛次將先探御料韻二字
置筥蓋昇自御前階獻之次公卿堪屬文者文人等

各進文臺頭採一字見之奏官姓名及所採字也今
按探韻ハ各分一字詩也をいふ韻字替る也故懐紙
端作云春日同賦春夜翫櫻花各分一字應制詩探得
某字如此書之べきなりこの一條を見て古昔詩會の優
美なるおもむきを知るべし後世ハ文字僧徒にのミ専ら行
はれし五山の禪僧詩文をよくせることの多しその頃ハ詩
會を短冊切といふ老人雜話曰南禪寺傳長老の時
短冊切の會あり龍山賞雪といふ題にて詩を作るその
後絶えてなし會の式ハ五山の長老及び西堂會し早
朝粥を供すさて題評といふことあり出世の人各題ひ
とつを書て一座を互にまはし然るべきことを其日の題に
定むるを題評と云題定りて後其題を上座の壁に
おしさて引合の紙を廣き短冊に切りて三十枚かさねて
面々の前に置き硯筆筆架水滴など盡しく面々に
供す詩成りて草稿を一座の衆まはし見て後淨書
しく座右の文臺に載すその後五山より一人づゝ出て
吟ず五山の吟聲各異なり詩事終りて大饗あり亂
舞酒宴夜に入るとぞ
聯句また聯詩ともいふ唐土の聯句とハ其法頗る異あり
玉海曰文治三年二月廿七日御書所作文云云先

例連句不過五韻云云而天永以往多有二十餘韻
餘可追舊例之由豫以仰宗隆仍連句有二十韻と
見ゆれバ連歌にならひて創意せしものなるべしと
おもはるゝ也五山の禪僧最も好みて此技に長ず韻法
限なくあり多くハ隔句對なく起を隔句對なさゞるを獨
句と云平仄詩とかゝるまで先唱するものを唱句とし
繼者を對句と云其法詩と異なりこれ此方の造爲
なり故に鳳城聯句序曰本朝之準式有異于殊域也
といへり
吾邦掩韻の戲あり西宮記宸宴の條延喜二年七
月十七日云云有掩韻事と見えたれバ其來ることふるし
或ハ韻塞ともいへり源氏物語花宴巻 枕草子 そゝくり顔なるものとゆへる
條に見えたり中務集に堀河の中宮れ韻塞の歌に
なつ山のしげりをわけくなく鹿をいづとめて人尋ぬ
らん河海抄曰古集の韻字をふさぎて何文字として
勝負するなり上古ハ掩韻を爲宗不好連句云云見
孝範朝臣記とありこれにて古昔及第の對策とく
するに古語の中を出しく上下をふさぎてなされ
句ぞやあてさするさまより出るものハ坐につきと
なり

和歌

古今和歌集序曰やまと歌ハ人の心をたねとしてよろづの言のはとぞなれりける世の中にある人ことわざしげきものなれバ心におもふことを見るものきくものにつけていひ出せるなりとぞ歌ハことより吾邦の風俗なれバぢふあめつちをうごかし猛ものゝふをもあはれとおもはせるをとこりわこそあれ雨森芳洲云玉露凋傷楓樹林美則美矣不如我猿丸大夫紅葉鹿鳴使人易感之為愈也（蛻巖文集）といへる知言といふべし

和歌といふ名目ハふるくハいはねどもて古事記日本書紀にハ見えずたゞ歌とのみあるなり和歌といふことハ漢籍を専ら學ぶ世になりて詩をも作り又彼國にも歌といふものあれバまぎれまがふゆゑよりして此方のをバ和歌とハよぶなりさて和歌といふこと此始めて見えしハ萬葉集に書殿餞酒日和歌四首（天平二年のことなり）又先太上天皇詔陪從王臣曰夫諸王卿等宜賦和歌而奏云云これなりさて後にいたり日本後紀よりして代々の國史そのほかにも漢文にかけるものにハ多くいへりこれハさもあるべし假名文にハかりそめにもかくまじき名目なれどもいひならはして後にハ物語文などにもまゝ見えたりさて漢文にても歌のことを

のこりし書なれバたゞ歌とかくべきことわり此故に萬葉集ハ詞書ハこれ漢文なれどもたゞ歌とのミかけるに和歌とかけるハ右にいく二ッのことありかれも始めあるハその時に詩なども作りたまひけれバかくかけることもあるべし次なるハ詔命此詞あれバ是また詩にまぎるゝことありぬべき故なり其外和歌とかけることあまた又ところどくに和歌とかけるハ後の集に返しとかけることのみにて答歌なり詩の和韻といふことなるにてかゝる和字なくやまと歌の義にあらざれさて延喜の敕撰集を古今和歌集と名づけ眞名序に夫和歌者とかき紀出し紀氏の新撰の序にも和歌といへる類ひ歌のことの

いふ書に和歌とのみをもちいられぬことあれどもふと出し出しゝいふ時ニハかならず和歌といふがなべてのならひになりそのちかくハいよ〱さのごときあなわり石上私淑言

唐土に詩話あり吾が邦の歌にもまた抄物あり四家式歌經標式・喜撰作式・孫姫式・石見女式・五家髓腦新撰髓腦・能因歌枕・俊頼無名抄・綺語抄・奥儀抄・八雲御抄○を始め猶多かり近來僧契冲荷田在滿等のいふところ博學精覈その言徴とすべきに足ところ殊に荷田氏の國歌八論その説ハ純粹ならずといへども大醇小疵なく白玉の微瑕にたとふべし實に千古の卓識愉快の論といふべし斥非評語等ありといへども蚍蜉樹を

攄(ウコ)し斥晏鵬を笑ふに異ならじとやいはん
歌に制の詞とて俊成卿の好みよむべからじと宣ひし詞
定家卿の不(ル)庶幾(セ)と宣ひし詞などなほ多くよむまじき
詞ありけりされ歌ハもと詞花言葉をこととすれバいふも
風體ハ幽艶ならんことを求めよく言辭の鄙俗なるを避べき
ことなれどよむまじきといふ詞やあるべき古歌の質に過る
詞と名歌の巧を極めたる句ハ遠慮をすべきことゝなりさも
あるべきことなりさて制の詞をきめく説破せしハ戸田茂睡ぞ
嚆矢なるべき（詳には梨本集に見えたり）これに次ぐ荷田氏の避詞論（八論の一）
などなるべし

新撰菟玖波集序曰それ連歌ハやまとうたのそれ一ッの體と
してそのみちよりつゞきて人の世にさるまでありその句を上下に
うちもしことハやまとごとのことをれあひぞりつゞきのことのそは
そしまたその文字を五七にとゝのへしことハ大伴家持がかる
ささいひとつゞねしよりぞおこりけるとあれど珥比麼利の
詠ハ景行紀に見えて（日本武尊歴常陸至甲斐國居于酒折宮時擧燭而進食是夜以歌之問侍者曰珥比麼利菟玖波塢須擬氐異玖用加禰菟流諸侍者不能答言時有秉燭者續王歌之末而歌曰伽餓奈倍氐用珥波虛々能用比珥波苫塢伽塢即美秉燭人之聰而敦賞）三句の
歌の贈答ありかゝるさいひの歌ハ萬葉集に載せて（尼作頭句並大伴宿祢家持所誂尼續末句・佐保河之水乎塞上而殖之田乎 尼作 苅流早飯者獨奈流倍志）

家持續

一首の歌を二人してよめるまでのことありさて拾遺和歌集に内にさふらふ女をちぎりて侍りたる夜おそくまうでくるほどにうしみつ時と申したるをきゝて女の人こゝろうしみつ今はたのまじよといひつかはしたるに良岑宗貞夢にみゆやとねぞすぎにけるといひ伊勢物語に業平朝臣の伊勢へかりの使にいきしに齋宮にあひ奉りたる朝女のかたよりいだしたるさかづきのさらに歌を書て出したりとあるを見れバかち人のわたれどぬれぬえにしあればと書て末ハなし其盃のさらについまつのすみして歌の末を書つくまたあふ坂の關ハこえなんといへることにてハまさしく後の連歌のさたありされど連歌といふ名目ハ金葉集に始めて見え連歌するといふことハ詞花集の詞書に見えたり八雲御抄ニ曰ク昔ハ五十韻百韻とつゞくることハなしたゞ上句をも下句をもよみてひとつをバいま一人つけたるなり今のやうにくさることハ中頃よりのことなり賦物なども中ごろよりぞことに欤又筑波問答ニ曰ク後鳥羽院建保のころよりしろくろまた色々の賦物のひとり連歌を定家卿家隆卿などにめされて侍りしより百韻などになりて侍るにやともいへり

和漢連句ハ歌と詩とを聯句せるなり和漢ともに擧

句漢たるべし漢和にハ和句たるべし 無言抄 漢和のことを
古筑波集に始めて見えたり古昔これに似たる事あり
枕草子ニ曰蘭省花時錦帳下と書てすゑハいかに〳〵
とあるをいかゞハすべからん御まへのおはしまさバ御らんぜ
さすべきを是が末知り顔にたど〳〵しき真名に書た
らんも見ぐるしなど思ひまはすほどもなくせめまどはせバ
たゞ其おくにすびつのきえたる炭のあるして草のいほりを
誰か尋ねんと書付てとらせつれとありこれぞその始と
いふもあらねどかゝるをなどやその偏ハなしらん

印板

印板の最もふるきものハ今も大和國法隆寺に傳はる
ところの寶龜勅願の陀羅尼なり續日本紀ニ曰寶龜
元年四月戊午初天皇八年亂平乃發弘願令造三
重小塔一百萬基高各四寸五分基徑三寸五分露
盤之下各置根本慈心相輪六度等陀羅尼至是功
畢分置諸寺この陀羅尼黄紙を用ひたりこれに次
てハ金色院の牛王寶印あるべし宇治の南十八町ば
かりに白河村といふありそこに金色院とて越の泰澄
法師の上足昭澄上人の開基にして年ふりし寺なり
この僧房に金色院牛王寶印と彫りし印板を今に存

せりその裏に冬安□年と記せり奇遊談とぞ或ルヒト云貞觀
已に木印あれバ梨棗の印板後世のことにあらざるべし
然れども今マ隻字存するものを見ズ好古小録といへり
三國傳記ニ曰ク鑒眞盲タリト云ヘドモ律ノ三大部ヲバ手自ラ印板ヲ
開キ給へりと見ゆ按ずるに鑒眞東征傳ニ曰ク天平勝寶六
年甲午正月十三日丁未副使従四位上大伴ノ宿禰
胡麻呂奏ス大和尚到ルト筑志ノ大宰府ニ二月一日到ル難波ニ
とあり招提寺ノ造立ハ寶字三年八月にあり遷化ハ寶
字七年五月六日にありこれによるときハ寶字以往なく
大部の書をも印板せし如くありといへども東征傳を始め

扶桑略記元亨釋書等鑒眞の傳紀に三大部の印板を
開きしことを見えざれバ頗る疑ふべし蓋し後人の謬傳ならん
立世安國論ニ曰ク元仁年中ニ自リ延暦興福兩寺度々經
奏聞ヲ申シ下シ勅宣御教書ヲ法然之選擇ノ印板取リ上ゲ大講
堂ニ為ニ報ゼンガ三世ノ佛恩ヲ令ム燒失セ之ヲ吾妻鏡ニ曰ク寛元二年六
月三日今日於テ大殿ノ御方ニ被ル供養セ百部ノ摺寫法華經
蓋シ是所ロ被ル加ヘ後鳥羽ノ院御追移ヲ也形木ハ則以テ後ニ勅筆ヲ
被ル彫ト之ヲ云云西山御傳ニ曰ク五部ノ大乘經天台六十巻
淨名涅槃疏菩薩戒義記顯戒論顯揚大戒論等コトゴトク印板ヲ開テ未來ノ益ヲコヽロザス　西山ハ淨土西山流ノ祖善惠のこと

なり西山上人年譜ゆい章疏鏤梓のことどもを寛元四年秋に係られ ことゝされ當時の實録なれバその頃かく多く佛典の印板を開きしと分明なしく方今たまく残缺の經巻尚世に存するものあるを見れバ疑ふべからず

經傳を梓行せるハ論語最もふるし正平年間刻せるところのもの今なほ存せりその書の巻末に云堺浦道祐居士重新命工鏤梓正平甲辰五月吉日謹誌按正平甲辰寔為後村上天皇正平十九年此書之刻距今僅四百五十餘年其所刷印流傳希少好古之家適藏弆焉又云一則有跋本今所刻是也一則無

跋本後人削去跋文者合而校之界欄字形皆是一様蓋同本也吉田學生誤以無跋本為正平原本其所輯論語攷異稱舊板大字本者是也然無跋本印板残缺尚存于世跋二行削去之痕隱然則知無跋本為後出無疑也又據跋所謂重新命工鏤梓則正平猶有原本與然今竟不可復求也（正平板論語札記）この後天文年間刻せるところの本あり天文癸巳八月乙亥清原宣賢卿跋曰泉南有佳士厥名曰阿佐井野一日謂予云東京魯論之板者天下實也雖然離丙丁厄而灰燼矣是可忍乎今要得家本以重鏤梓

若何予云善これによれバ此本もまた再刻あるを知るべし其餘明應年間周防の平武道といふもの刻せる本ありといへどもその他經家にあらざるものに於ては正中の詩人玉屑延文の揚仲弘集至德の韓文嘉慶の柳文文明の聚文韻略明應の三體詩など猶あるべし

醫家にては大永の醫書大全を始とす其跋曰吾邦以儒釋書鏤板者往々有焉然未曾及醫方恵民之澤人皆為鮮近世醫書大全自大明來固醫家至寶也所憾其本稍少欲見而未見者多矣泉南阿佐井野宗瑞捨財刊行彼明本有三寫之謬令就諸家考本方以正斤兩雖一毫髪私不増損蓋宗瑞之志不為利而在救濟天下人偉哉陰德之報永及子孫矣大永八年戊子七月吉日幻雲壽桂誌とありこの書此印本今存するもの少からず

活字板その始を詳にせず今世に傳はるものをもて按ずるに文祿年間の蒙求よりふるきはなしされバその頃よりはやくありしとぞ按ぜらるゝしかれどもその盛に行はれしことハ慶長元和にあり今世に傳はる活字本多くハこの頃當時京師にて刻せるところのものなりあるひハ活字の

經傳をもとて世人槧して足利本と稱するハ下野の足利學校にてかくる印板せしものありしを傳へてかくまでいふなるべし今も足利に活字印數百枚殘りその字體縮小にして今存在するところの諸書に合ハず自らこれ別物なるを志るべし足利ハ上杉安房守憲實が再興せしより學校さかんに生徒多かりしよし鎌倉大艸紙に記しこれバ經書を印板せしこともありぬべけれど流傳廣からざりしにやたゞに足利本といへるものいまだ經見せず今になべて世に存し行はるゝところのものハ悉く洛東の舊本なりかし 活版經籍考 さて永祿以來出來初事載ニ遺

老語物と題せし冊子に秀吉公御代の事といへる條に一字板これハ高麗入ありし故なりといへりこれ一字板といふものハ按ずるに活字のことなるや高麗入ありし故といふは朝鮮の役ありしとき活字印板の方を吾が邦に流傳せりといへるところなれや記して後考を俟つのみむかし周防の大内介ハ山口の城に居て西國に名を得たる大諸侯なり紙を唐土に渡して書籍を摺せしく取よせられ今に至て猶殘れりこれを世に山口本とも大内本ともいへり 老人雜話 また杜子美詩集千家註此印本を足利本といへどもさにハあらで昔朝鮮に便りなき時

吾が邦の紙をかしこに遣しく板を摺らしめるともいふ（大和事始）この二事その趣きたえて相似より今よりこれを見るときハ異邦まで紙をもたらして書を覓むるを文教も盛んに書を聚るにも篤きに似られどその實ハ書まで乏しきが故なりさて慶長の末より印板も行はれしが寛永正保よりやゝ多く元禄享保に盛んに今に至りて極れりといふべし和漢をいはず巨冊奥編といへども書として梓行せざるハなくこれに加ふるに舶来新渡の書も亦少からず物常聚於所好而常得於有力之疆（集録序）古今をとりて古昔の人に比すれバ鈔書の勤苦を歴ずして不日に

萬巻の奇書珍籍を架上に致さんことも難しとせざるところなり遠郷僻地といへどもまして何ぞ書に乏しきの憂あらんやこれぞ國家の盛徳昭代の美事にして假令入唐留學を心に任する世といふとも以て踰ることあらじといふべきかゝる時世に逢ふことハ豈人生の太幸ならずや人性善といへども學ばざるときハ微にして著まじ小にして大ならず蠢然として空しく光陰を過さんこと噫まこと何事ぞや學如不及猶恐失之（論語）といへり歳月居らず時節流るゝが如し児曹それ懋哉

明治三十六年六月一読了 碌凡

文教温故巻之下 終

慶元堂藏板目録

江戸浅草新寺町 和泉屋庄次郎

四庫全書總目 全六冊

清乾隆帝四庫館ヲヒラキ文淵閣書目ナラビニ附存目録ヲ出ズサキニ刻行スル焦氏經籍志等ハ世ニ存セザル書マデヲ附ス頗ル無益ヲ覺フコノ總目ハマノアタリ上古ヨリ清朝マデ傳ハリ存スル所ノ書ノ品目ニシテ學者ノ家ニ闕ベカラザル書ナリ

文化二年　官刻成

唐宋八大家讀本 清沈德潛著 全十六冊

韓昌黎　柳柳州　歐陽公　蘇老泉
蘇東坡　蘇潁濱　王荊公　曾南豐

右八大家ノ文章ナリ撰者沈德潛ハ乾隆帝ノ翰林學士ニテ後秀ナル學者ナルユヘ選文皆純粹ニシテ文人ニ裨益アル書ナリ

文化十一年　官刻成

台宗二百題 全十五冊

台宗論題書アマタ有トイヘドモ古題ニシテマワリドウレ此二百題名宗論題ニ益アルコ演説ヲマタズ古板不幸ニシテ天明年間祝融ノ災ニカヽル然レドモ台家ニ一日モ闕ベカラザル書ナルヲ以テ再板成テ舊ノ如ク行ワル

東叡山御藏板

元三慈眼 兩大師御傳記 寫真入 全五冊

兩大師御高德ハ世人ノ知所ナリ別シテ南光坊慈眼大師ノ御德ノ廣大ナルハ筆帋ニノセガタシコノ御傳記ハ大師御直弟子凌雲院胤海僧正ノ著述ナリ画工ハ土佐家住吉具教ナリ恐レオヽクモ板本ニ
神君様并ニ
三代將軍様ノ

御影像入候書コノ一書ニカギレリ香ヲ薫シ盥ヒ漱イデ拜覽アルベキ書ナリ
東叡山御蔵板

陸德明經典釋文并考證 全卅冊

コノ書ノ原本ハ影宋本ニシテ清盧文昭考證ヲ為ル其中　本邦物氏ノ七經孟子考文補遺等ノ書並ニ唐宋以上ノ書ニ依テ精微ニ校正ス　本邦ヘ唯一本舶來セシヲ得テ翻刊ス實ニ經學者ノ文房ニ須臾モ無ンバアルベカラザル書ナリ此書ノ奇特ナルコトハ予ガ著ス所ノ經典釋文盛事ニ詳ナリ

九經談 大田錦城先生著 全四冊

今ノ世ニ經義ヲ論セル書數多アリトイヘドモコノ書ニマサレルハナシ抑〻先生英邁ノ大活眼ヲ開キ學問ニ該博ヲ極メ發明スル所アリテツイニコノ書ヲ著ス論スルトコロ考據ハナハダ正シクシテ多ク先賢ノイマダ發セザルトコロヲ說破スマコト一四方ノ學者ヲシテ耳目ヲ新ニシ經學ノカヲタスクル書ナリト云

聖道衣料篇 佐野盛典著 全二冊

上巻ニハ二衣五衣ノ事下袴ノ事天台真言傳法灌頂ニ束帶種〻莊嚴ノ事紫甲青甲ノ袈裟ノ事鼻高及草鞋等ノ事
下巻ニハ輪袈裟ノ事金襴地衲衣袈裟ノ事半裝束數珠ノ事袈裟得名ノ事衣料ニ尺法有事其外佛家ニカヽハリシコト〻モ委シクカキノセタリ

聖語掇輯 日蓮宗堅樹著 全二冊

大學纂釋 精里古賀先生著 全二冊
同諸說辨誤

范石湖詩鈔 周雪蒼 紫錦川 全鈔 全三冊
陸放翁詩鈔 北山先生閱 全 全四冊

ヲ家ハ南宋詩ノ大家ナリ范詩ハ凄婉工緻悲壯精細ヲ兼備シテ唐ノ李青蓮ノ比ナリ然ヲ青蓮ノ詩ハ奇ニヲ逸ナルエ學ビガタシ范詩ハ奇ニヲ密ナルユエ學ビヤスシ陸詩ハ富贍ナルコ万首餘ニ及ビ渾融和雅憤悲ヲ兼又唐ノ白香山ニ比ス然ヲ香山ノ詩ハ總テ懽樂ノ意ニヲ憤悲ノ詞スクナシ陸ハ忠憤ノ詞多シ是陸ノ勝レル所ナリ二家トモニ詩學ニ大益アル書ナルコ北山先生ノ序ニ詳ナリ

聯珠詩格 元 于濟 蔡正孫 編 日本 詩佛先生校 蔡篆齋增注 全五冊

コノ書ハ唐宋詩ノ格アルモノヲ悉クラセ注解ヲ附タレバ作詩家ノ闕ベカラサル書ナリ一齋先生ノ序ニ此書清朝ニ闕テ幸ニノ本邦ニ存スル由ヲノベタリ

四書集注 道春点 大字本 全十冊
正德年間ノ刻本ニノ極テ大字本ナリ
書紙揭木候
大方君子所求

伊勢物語增選鈔 定家卿注 全一冊

假字考 岡田真澄著 全二冊

芭蕉文集 小林龍山校正 常盤屋句合入 全二冊

隨齋諧話 成美先生著 全二冊

四山稿 成美先生著 全二冊

歸正漫錄 安井息軒先生著 全二冊

宋明名儒數輩ノ佛老ノ害ヲ論セシヲ諸書ヨリ涉獵ソ記出ス異端ノ邪路ニ迷ノ者ヲソ正シキ儒道ニ帰リ入シムルノ書ナリ

聯珠詩格 小本 全二冊

懐中本ニシテカタハラニ押韻平仄ヲ附シテ初學ノモノニ便リス作家ノ活法タルモノ此冊ヨリ善キハナシ

同 譯注 如亭先生著 全一冊

サキニアラハス所ノ詩格小本韻字ト平仄ヲ附トイヘ𪜈初學ノモノ、解シカタキヲ患ヒテ片カナニテ詩意ヲ委シク解キタレバ初學ノ者トイヘ𪜈詩意ヨク解テ師家ノ口舌ヲ労セズト云

宋三大家律詩 老山 詩禅 両先生選 一冊

范石湖楊誠齋陸放翁三家ノ全集ノ中ヨリ律詩ヲ撰アツメ作詩人ヲシテ三家蹴聯手段ノ妙ナルニ学バシムル為ニス

刀剣或問 肥後松村昌直著 全五冊

此書ハ松村生刀剣ノ鍛錬ト鑒賞ト

和漢年代廣記大成 全一冊

是迄ノ年代記トハ殊ヤフニテ一年毎ニ日本ト唐山トヲ合置テ見安カラシメ一紙ニ八十年半紙ニ四十年一行四年ト隔アレバ年ヲ数フルニ甚便利ナリ毎年ノ乱事ニ於テハ無益ノコヲ省キ大事有益ノコヲ大ニ委シク記シタレハ外題ニ廣記大全ノ字ヲ冠ラシメタリ

和漢年統 鏡湖大野先生編 新刻 全一冊

此書ハ一頁毎ニ六十年ヲ載セ支干ヲ附和ヲ上ニシ漢ヲ下ニシ年ヲ数フルニ屈指ヲ待タズ和ハ六國史ヨリ始メ近世ニ至ルマデノ正史及ビ諸家ノ實録ニ因テ正シ漢ハ廿一史ヨリ始メトシテ清三朝實録マデヲ採リ尚モ有用ノ事ヲ漏サズ汗牛ノ書ヲ約略シテ一巻ノ小冊子トナシ好事家ノ用ニ供ス歴史ノ索引ニシテ典故ヲ探ルノ捷徑ナルコノ書ニ過タルハナシト云

枝ノ蘊奥ヲ尽シテ古来發復古ノ説ヲ立テ朋友又門人ト多年問答シタル趣ヲ録セシ書ナリ曽テ此技ヲ四方ニ学ビシトキコレヲ他人ニ漏ラスマジキヨシヲ鬼神ニ誓テ諸家ノ秘傳ヲ受今其誓約ヲ破テ此書ヲ著シ士タルモノ、為ニスモシ神罰セハ國家ノタメニ身ヲ以テコレニ當ラント欲ス是コノ書ナルノ基ヒナリ刀剣ヲ好ム人必見ズンバアルベカラズ

萬葉集楢落葉 正木千幹大人輯 全五冊

天象地儀神祇釈教國郡居処人倫服食器財草木鳥獣魚蟲ノ類ヲ分チ歌ノヨシアシヲイハデ此集ニ始テヨミ出タルヲ取テフタヽビ見ヘタルヲバ省キ或ハ珍ラカナル或ハミヤビタルスベテ古事ノ考證トナルベキ詞ドモヲモラサズ拾ヒ頭ニアゲテ歌ノ作例ヲツバラニセリイデ傍ニ流布ノエリ巻ノツイデモテ何巻何丁ノ表裏ヲ

[illegible]野乗 京 奥桂著 家 合齋校 全一冊

同 漫筆

奥桂先生ハ一世ノ鴻儒ナリ此編ニ元亀天正ノ頃ノ忠臣勇者ヲ紀スルヲ以テソノ史トナルヲ見漫筆ヲ以博物ノ議論ヲ見増彦教ニ復スル書ヲ以テソノ非ヲ非トシ物ヲ詰スルノ卓タル識ヲ見先儒ヲ評論スルニ至テハ直甚深味アリ此書ハ實ニ先哲叢談ト併見スヘシ

江戸土産 重長画 三冊

同 續篇 鈴木春信画 三冊

此繪本ハ江戸ノ壮観及ビ處々名所ノ風月雪花ニ春夏秋冬景色宜キ地并ビニ種々名物マテヲ図画シ且ソノ地ソノ物故事縁由ヲ備ニ記セリ實ニ諸国ニ行家苞ニ宜シキノミナラズ江戸ノ人トイヘ𪜈見聞ヲヒロムルニ足レリ

サハ委シク記サレタレバ古ヘフリノ歌ヨムベク又古ミヘマナビセンニハ片時モ机上ヲハナツベカラザル書ナリ

萬葉集借字對照　正木千幹大人輯　全一冊
コハ此集中ニ見ヘタル借字ト真假字トヲムカヘ照シテエリ出サレタレバ本艸和名新撰字鏡和名類聚ナドニモレテイトノヽ古クヨリミヘタル文字ノ和訓ヲシルベキ神國ノ寶鑑トヤイフベキサルハイニシヘニ心ヲヨセテ歌ヨミヽヽマナビセンニハ坐右ヲサルヽマジク又所謂萬葉ガキナドセンニ識ニヲモシロキツカヒサマノ文字數多見ヘテ世ニタグヒナキ書ナリ

桂林詩集　三縄準藏先生著　全三冊

雙桂集　原公韶先生著　全三冊

髙眠亭録稿　全四冊

挿花四季詠　遠州流 森一訓著　全四冊

新錦木物語　東賢女鑑　五冊

江戸獨案内　全一折

孫過庭書譜　草書中字　一冊

米芾清蹕帖　行書大字 正面搨　一帖

文徴明西苑詩　行書中字 正面摺　一帖

郭有道碑　大字隷書 正面摺　一帖

董其昌江南帖　中字行書 正面摺　一帖

董其昌古文衡　行書中字　一帖

多胡碑并考　一冊

精里初二集抄　精里古賀先生著　五冊

同三集文稿　五冊

桂林遺稿　三縄準藏著 近刻

千字訓童行　[illegible]菴和尚著　全一冊

大清三朝事畧　村山芝塢 北条水齋　略[illegible]

唐土名妓傳　清曼翁著　全二冊
明ノ盛ナリシ時游女街ノ事情ヲ書ナラベ至テ面白ク讀カヽリテ手ヲ放チカタキ本ナレ圧無点ニシテ俗語ナル故讀ガタシ今ソノ側ニ片カナヲ以テ和解ヲ添タレハ甚讀ヨク分リヤスシ無雜作ニイハヾ通俗ノ洒落本ナリ然レ圧能學者ナル清人ノ著述ナレバ猥ナラズ滑稽ヲ表トシ勸善懲悪ヲ裏トシタリ亦文章尺牘ノタメニヨキ書ナリ

烏石前赤壁賦　楷書大字　一冊

同後赤壁賦　同　一冊

平林淳信伯夷傳　行書大字　一帖

本草和名　大醫博士深江輔仁奉勅撰 法眼多紀安長先生校　全二冊

神農本經　小刻 大本 鈴木賜谷校　二冊

黴瘡結毒方論　序 桂川國瑞　二冊

神代卷　全二冊

神武卷　全一冊
數校アレ圧松島社藏校トアル本ハ悉ク良本ヲ集テ校正シタルユヘ脱字モ誤字モナキ善本ナリ　日本ノ人タルモノ此二書ヲ讀マズンバアルベカラズ

和漢善行録 一名大和爲善録 藤井懶齋先生著 三冊

和漢古今善ヲ行ヒ隱徳ヲ施ス人甚多シ然レトモソノ姓名詳ナラズ或ハ大部ナル書物ノ中ニアル故其名モ事モ世ニアラハレズ人遂ニソノ行ヒヲシルモノ少ナレ此書物ハ 日本ハ三代實録文徳實録等ヲ始メ近世ニ至ルマテ唐山ハ明ノ成祖ノ為善陰騭録ヲ基トシ太平御覽事文類聚迪吉録ナドヨリ撰出シタレハ勸善懲悪ノヨキ玉鑑ノ書物ニマサレルハナシヨツテ國字ガキニシテ童蒙女兒ニ見ヤスカラシム覽ル人コレヲカヽミトシテ習ヒ學ヒテ善行隱徳ヲ積ミ施シタヽハヾ上天イカデカ餘慶ノ福ヲ降シ賜ハザラシヤト云尓

嬌世餘言 全一冊

庭訓往来 尊圓親王筆 大字 一冊

日光御神忌御法會御參勤付 一冊
御法會御日割御導師御宮様方御附御手替御府内諸國僧正院家檀林大寺御直末又末并衆徒寺中諸國諸山ノ總代方御列名等クワシクシルス

元三大師百籤和解 一冊

七觀音經 大字両点付 心經入 一冊

法華宗日鑑 三十番神入 一冊
高祖聖人ヲ初宗門ノ高徳名僧諸國諸山ノ開山方等ノコラズ記シ日〻ノ拜礼ニ供フル書ナリ

觀音諸品經 附 般若心經
七觀音尊影○同縁起○同神咒○普門品○觀音經秘鍵○千手陀羅尼○六觀音真言○普不空羂索○十大願○十句觀音經○三十三身御影○同和讃○同養屬廿八部衆

以上

彙刻書目 清顧脩篆著 全十巻
コノ書ハ清朝ニ現存スル叢書類書等ノ彙刻モノヲクハシクアツメ記タル書也讀書好事家ノ君子一刻モ左右ヲ不可闕書也
文政元年 官刻成

卜子夏易傳 小林龍山校正 全十一巻

瀛奎律髓 元方回字萬里著 号虚谷子 全四十九巻
門類四十九ニ分ツ唐宋ノ律詩ヲ精選シタル書ナリ朱子ヲ尊タル人ナリ自序アリ古今詩ヲ集タル書汗牛充棟トイヘトモコノ書ニマサレルハナシ

同 横切巾箱本 懐中薄用本モ出来 朝川善庵著 全三冊

近聞偶筆 吉田篁墩著 近刻 全四巻

西銘 全一冊

閱藏智津 明蕅益智旭著 佐伯岸蔵板 全四十八冊

淨名經三觀玄義 天台大師著 全三冊

請觀音經疏會本 天台大師著 頂法師説 全一冊

像法決疑經記會本 沙門本純著 同周圓分會 全一冊

例時懺法 淨名律院菩薩 比久聖寶校正

法華懺法 全一帖

三陀羅尼 右五種東叡山御板 全一冊

天台四教儀 高麗沙門諦觀録 全一冊

佛道手引草 大賢和尚著 全三冊

觀世音御和讃 全一巻

墨子全書 近刻 全十五巻

世間流布ノ本ハ誤字脱文等多有之杜撰ニシテ取ニタラス今刻スル本ハ清朝ノ畢阮カ經訓堂叢書中ニ納ムルトコロノ本ヲ真面目ニ翻刻シ點校ヲ善庵先生ニコイ稀世ノ善本トス世ニ公スルノ日四方ノ諸君子一套ヲ求予言不妄ヲ見玉ヘ

舊注蒙求 龜田鵬齋著 全三冊

大學私衡 同 全一冊

黍稷稲粱辨 同 全一冊

善身堂一家言 同 全三冊

學古編 全一冊

古今文評 王道光著 全一冊

萬民德用 鈴木正三著 全一冊

二人比丘尼 一名化野物語 鈴木正三著 全一冊

麓ノ草分 鈴木正三著 全一冊

正三老人行脚ノ後三河石平山ニ居シ生ヲ利スル事年久シ末後ニ慶安戊子ノ頁関東江城ニ至テ諸人ヲ濟渡ス大悟道ナル人ナリ

衣裏寶珠書 艸山元政上人著 全一冊

法華初心成佛抄 沙門日華著 全一冊

此書ハ高祖大士御妙判録内廿二巻ノ内ナリ此書俗家ニシテハ解シカタキコトモ多シユヘニ今平カナヲモツテコレニ注解ヲクワヘテ宗門信仰ノ人ニアトフ

一念三千等御書 日遠上人御文 全二冊

先哲叢談 原念齋先生著 全四冊

此書ハ文禄慶長ノ際ヨリ享保元文ノ頃ニ至ル迄名聲籍甚ノ碩儒聞人ノ列傳ニシテ其姓名字号俗稱生誕没故ノ年月日マテ洩サズシルシ稗史箚記及ビ口碑ニ存スル言行ノ奇談ヲ悉ク採摭メ古人ニ面接シテ往事ヲ見ルガ如クナラシム其言行篤實アリ博覧アリ抗辭アリ嬉後アリ執拗アリ介僻アリ可貴可感可喜可驚可哀可笑ノ佳話甚多シ於ニ看官大ニトル時ハ修身齊家ノ模範トナスベク小ニトル時ハ温故知新ノ談柄トナス此書ニヨラズシテ又何カアラム研尋ノ君子一度巻ヲ開カバ終日手ヲ離シ事ヲ得サルホドオモシロキ書ナリ

瓶花庵詩集 附瓶話 全一冊

時代摸画 俳家奇人談 遊俳青〻山人著 蕙齋紹真臨図 全三冊

此書ハ往古宗祇宗鑑守武貞徳ヲ初トシ中古芭蕉其角嵐雪園女千代等其外高名ノ俳客ハ一有餘人贈答ノ發句金玉絶妙或ハ奇事生卒等ヲ挙面白キ風流ノ話説ナリ巻中ノ画図ハ守武ノ肖像貞徳書斎ノ図貞室芳野山花見ノ図芭蕉翁浪華花屋ノ寄病ノ図并翁頭陀袋傳来ノ由来場見物ノ図又古人名家ノ真蹟短冊并画賛点印点式等数多何レモ其一二ヲ摸写ス是皆世ニ稀ナル秘蔵ナリ且當時三都ハ云ニ及バズ諸国名家ノ發句ヲ巻末ニ附録ス素ヨリ詩歌連俳一躰ニシテ古今縉紳家ニモ詠セラレナレバ詩歌連俳ニオイテノ名家ノ奇談小説多ク編集セリ爰ヲ以テ俳家ノミニモ限ラズ風雅好事ノ君子坐右ニ貯ヘタマハバ古今風流変化ノ趣ヲ知リ

摹畫集 宋孫晳仲著 全四冊

此書題画モノニシテ諸君子ニ有益ノ書ナリ
文化十四年成官刻

楊子方言 漢楊雄著 全三冊

疊字法帖 尊朝親王筆 行書中字 全二冊

本朝名公墨寶 全二冊

彙刻書目外集 全六冊

此書ハ古今舶来スルトコロノ彙刻物ヲ予カ目撃スルコトニ数年書集ヲキタルヲコノタビ渡来スル彙刻書目ニ照重出ヲ刪リ脱スル書ヲ載セ外集ト題シテ梓ニチリバメ諸君子ノ高覧ニ備ト云爾
慶元主人自題

参考伊勢物語 屋代輪池先生著 全三巻

世ニ注釋数十家有トイヘトモ皆定家卿ノ校本ニ拘ル此本偶定家卿ノ校正ノ稿本ニヨリ朱雀院ノ塗籠御本ト全行本トニ参考シテ精校シ先生ノ考案ヲ附ス此本ニヨリテ久シク難義トスル所ヲ解シ安キ也

且書画鑑定ノ一助ニモナルベシ方今文人盛ニシテ諸家ノ著述新撰日ニ月ニ多クシテ書肆コレガ為ニ彫刻ニ倦ト雖圧此書ニオイテハ国書關典ニシテ未曾テアラザル新書ナレハ此度速ニ刻シテ都邑風流君子ノ尊覧ヲ希フ所ニ

長崎先民傳 崎陽盧驥撰 皇都原念齋校 全一冊

此書ハ和漢ノ諸名家崎陽ニ游寓タル者ヲ盧驥先生聚類別部テ十三門トナシ姓名字号俗稱ヲタヾシ言行ノ奇談事蹟ヲツブサニシルシタレバ博覧ノタスケトナルノミナラズ佳話甚多シコトニ名高キ文人ノ著作ナレバ初学文法ノ助トモナルベキ本也

別部如左

學術 談天 隱逸
貞烈 處士 技藝
醫術 通譯 忠孝
流寓 善書 任侠
緇林

鷲村畫譜 抱一先生 全一冊

胸中山 鵬齋先生 全一冊

寫山樓画筆 文晁先生 全一冊

此畫譜ハ當今天下ノ人瞻仰スル所ノ大家各自ノ肉筆ヲ鏤刻シテ画則ヲ學ブノ先生ニ親炙セズシテ直ニ其堂ニ升リ其室ニ入ル階級トス其蒐羅スル所昂然タル人物悠焉タル山水霄漢ノ飛禽山野ノ走獣草花艶麗ナル樹木ノ鬱葱タル藻ニ隠ルヽ鱗介土ニ蟄ク蟲豸ニ至ルマデ宇宙間ニ在ル所ノ品類一ツトシテ備ラズト云コトナク水墨ノ濃淡ヲ交ヘ着色ノ疎密ヲ示ス丁寧親切今時現存ノ衆画譜ノ倫ニ非ズ往昔ヨリ舶来ノ畫軸多シトイヘ圧此画譜一度出テ徽宗ノ鷹風ニ逸レ東坡ノ竹雪ニ折ルト云ベシ其流麗清新寔ニ仰ベク貴ムベシサレバ三家各其意匠異ナリトイヘ圧約スル所神韻ノ高キ興致ノ深キ殆一世ノ風靡スルニ足ル見ノ者ニ其目ヲ悦バシムル而已ナラズ未ダ見ザル地ニ到リ未ダ見ザル物ヲ弄ブカ如ク博覧多識ノ資トモナリテ性情ヲ養ヒ視聴ヲ博ルノ術此画譜一部ニ盡セリ圧云ベシ賜顧ノ君子試ニ一褒ヲ閲シテ我言ノ妄ナラザルヲ知リ給ヘ

文化百人一首　酒井先生筆　蹄齋北馬画　全一冊
同　女今川入
女今川　女手習教訓状入　酒井先生筆　一冊
實語教　頭書入　一冊
隅田川往来　酒井先生筆　一冊
増補塵劫記　全一冊
日用算法記　一枚摺
萬寶年代記　一枚摺
手習仕様の歌　野田古愚先生著　画入全一巻
要語歌　同　全一巻

繪本武者大全　全二冊
将門一代記
八幡太郎一代記
田村将軍一代記
朝比奈一代記

職官志　蒲生伊三郎著　全七巻
淡海公ノ令義解及ヒ集解六國史扶桑記日本紀畧類聚國史職原抄官職秘抄等ニ依リ唐ノ李林甫カ六典等ヲ以テ皇國ノ職官ヲ参考ス職官ヲ明ラメント欲スル者座右ニ置ズンハアルヘカラサル書也

文會業餘　松澤老泉著　全四巻
古今蔵書家ノ印記搢紳諸侯方蔵板ノ書目。唐山ノ官板ヲ我國ノ書肆翻刻セシヲ皇國ノ官板ト混ズルヲ正シ通行本異板ノ書目活板翻刻ノ書目非破主客ノ問答ノ書我國五六百年以前大蔵経ノ板有シ考ヘ我朝古代武家或ハ寺社等ニ印刻セシ書目其外書画ニ掛ル奇談等ヲ集ル書也

文政十一年戊子刻成
山崎美成著
東都書林
浅草新寺町
和泉屋庄次郎